

第 70 回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム 3

「日本小児保健協会の魅力を再発見し未来へつなげる—若手会員とともに学会活動を考えよう—」

委員会活動から小児保健を考える「性教育の未来」

中井 靖 (京都女子大学心理共生学部)

I. はじめに

1. 若手による小児保健検討委員会

日本小児保健協会における委員会事業の一環として、2019 年度に若手による小児保健検討会準備委員会が設立され、2020 年度より若手による小児保健検討委員会に名称を改めた。本委員会の目的は 10~20 年後の未来を見越して、今から小児保健に関する課題の解決に向けて取り組むことを通して、小児保健領域全体の向上および啓発を推進することである。本委員会では若手だからこそその発想を軸に、小児保健領域の特徴である多職種連携に着目し、日本小児保健協会、さらには小児保健領域全体を活性する仕組みを構築することを目指す。

本委員会の任期は 2 年であり、その任期中はグループに分かれて活動する。2022 年 8 月~2024 年 6 月は 3 グループに分かれ、それぞれが 10~20 年後の未来を見越した小児保健に関する課題の解決に向けて取り組んだ。「小児保健の魅力を上げる方策の検討グループ (リーダー: 中山 祐一・大阪公立大学大学院看護学研究科)」, 「小児保健における ICT の活用グループ (リーダー: 森藤 香奈子・長崎大学生命医科学域保健学系)」, 「障害児の未来グループ (リーダー: 中井 靖・京都女子大学心理共生学部)」の 3 グループである。

2. 本シンポジウムの企画・準備

本シンポジウムは、本委員会の「小児保健の魅力を上げる方策の検討グループ」が企画した。本グループは、2023 年 1~2 月に日本小児保健協会会員を対象と

する小児保健の魅力に関する調査を行った。この調査結果を報告し、そして調査結果から小児保健の魅力を検討する機会として本シンポジウムが企画された。

本シンポジウムの構成は以下の通りである。

(1) 若手による小児保健検討委員会の発足と取り組みについて

中山 祐一・上述

(2) 会員ニーズ調査の結果報告

草野 恵美子・大阪医科薬科大学看護学部

(3) 委員会活動から小児保健を考える「性教育の未来」

中井 靖・上述

(4) 委員会活動から小児保健を考える「小児保健における ICT の活用」

木村 真司・岡山県立大学保健福祉学部

(5) 聴衆との討議: 皆様と小児保健や本協会の魅力、その魅力を発信する方策

II. 講演: 委員会活動から小児保健を考える「性教育の未来」

本シンポジウムで講演した、委員会活動から小児保健を考える「性教育の未来」について紹介する。

1. グループ活動の概要

本委員会の「障害児の未来グループ」は 2020 年度から発足された。2020 年 8 月~2022 年 6 月の第 1 期目は委員 5 名で構成され、2022 年 8 月~2024 年 8 月の第 2 期目は中井 靖・上述 (公認心理師・臨床心理士), 小谷 裕美子・徳島大学小児科 (医師), 津田 聡

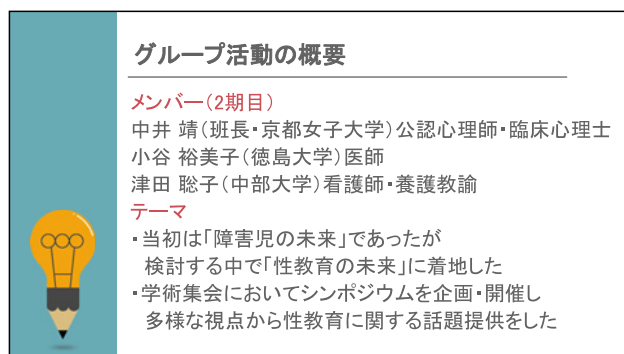


図1 グループ活動の概要

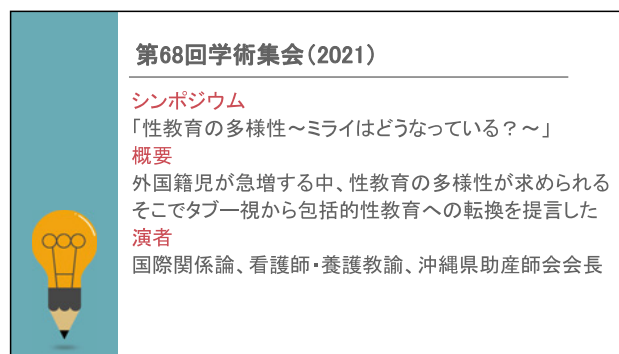


図2 第68回学術集会シンポジウム

子・中部大学生命健康科学部（看護師・養護教諭）で構成された。

本グループのテーマは、グループ発足当初は「障害児の未来」であったが、メンバーに共通する専門性および関心を検討する中で「性教育の未来」に着地した。これまでに日本小児保健協会学術集会でのシンポジウムの企画・開催を通して、この「性教育の未来」について多様な視点から性教育に関する話題を提供した（図1）。

2. シンポジウム「性教育の多様性—ミライはどうなっている?—」

このシンポジウムは、2021年度に開催された第68回日本小児保健協会学術集会の若手シンポジウム枠に採択された。

シンポジウムの背景・概要は以下の通りである。わが国の教育現場に外国籍の子どもたちが急増する中、母国での教育や宗教的背景などを踏まえた性教育の多様性が求められる。また、ウェブやSNSから子どもたちが性に関する情報を容易に入手できる状況にあり、従来の「寝た子を起こす」のようにタブー視する性教育からの転換が急務といえる。そこで、このシンポジウムでは性教育の国際的指針である包括的性教育に立脚し、国内外の多様な視座から小児の性教育に関する話題提供を行った。そして、固定的な規範で捉えるのではなく、多様な文化を尊重して互いに歩み寄りながら、未来の性教育のあり方を考え続けることの大切さを検討した（図2）。

このシンポジウムの構成は以下の通りである。

座長：中井 靖・上述

(1) これからの「性」との向き合い方—平和学の見解から—

Ronni Alexander・神戸大学大学院国際協力研究科（国際関係論者）

(2) インドネシアの性に関する教育—「多様性の中の統一」のなかで—

津田 聡子・上述

(3) 沖縄県における思春期性教育の現状と課題—スマホ社会、若者の望まない妊娠と性感染症をめぐる—

桑江 喜代子・一般社団法人沖縄県助産師会（助産師）

(4) 総合討論

3. シンポジウム「ミライに生きる子どもたちへの包括的性教育—セクシュアル・マイノリティの現状を踏まえて—」

このシンポジウムは、2022年度に開催された第69回日本小児保健協会学術集会の若手シンポジウム枠に採択された。

シンポジウムの背景・概要は以下の通りである。診療・支援の現場に携わる中でセクシュアル・マイノリティ当事者と関わるが増えてきた。医療従事者・支援者はセクシュアル・マイノリティの心理および現状を正しく理解していないことで不本意にその当事者を傷つけていることがある。そのため、セクシュアル・マイノリティについて医療従事者・支援者のみならず、大人や子どもが正しく理解することが重要である。一方で、学校教育ではセクシュアル・マイノリティに触れていない現状もある。そこで、このシンポジウムではセクシュアル・マイノリティに関する用語を正しく解説し、セクシュアル・マイノリティの医療現場および教育現場に関する話題提供を行った。そして、セクシュアル・マイノリティの心理および現状を正し

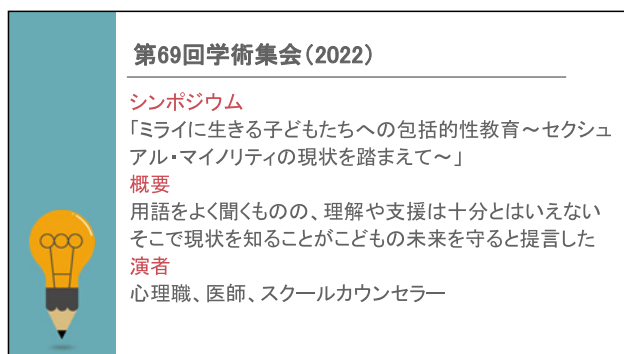


図 3 第 69 回学術集会シンポジウム

く理解することが診療・支援の第一歩となることを提言した(図 3)。

このシンポジウムの構成は以下の通りである。

座長：小谷 裕美子・上述

(1) 子どものセクシュアル・マイノリティについての基本的な考え方

佐々木 掌子・明治大学文学部(公認心理師・臨床心理士)

(2) トランスジェンダーの子どもの二次性徴・ライフプランなどへの支援のための医療と教育の連携

中塚 幹也・岡山大学学術研究院保健学域(医師)

(3) 教育現場を SAFE ZONE に！

葛西 真記子・鳴門教育大学大学院学校教育研究科(公認心理師・臨床心理士)

(4) 総合討論

4. グループ活動から考える小児保健の魅力

本グループでは、これまでに日本小児保健協会学術集会でのシンポジウムの企画・開催を通して、「性教育の未来」について多様な視点から性教育に関する話題を提供した。このグループ活動を通して小児保健の魅力について検討した。

1) 性教育のような複合領域テーマに強い

性教育に対しては多様な考え方、価値観、文化、歴史の影響がある。そのため、性教育は国内—国際の文化、過去—現在—未来の時代変遷、そして医療—教育—福祉の専門性などの複合領域テーマといえる。このような多様性を正しく理解すること、考え続けることが重要である。

小児保健の特徴の 1 つに多職種連携がある。日本小児保健協会では「子どもたちの健やかな成長を願い、小児保健に関連する多職種の会員が共に研鑽を積み協

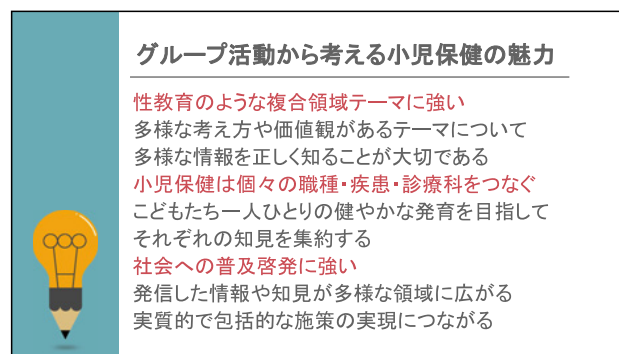


図 4 グループ活動から考える小児保健の魅力

力して、小児を取り巻く保健、医療、教育、福祉の向上、さらにこれらを広く社会へ普及啓発する活動をおこなっています」と掲げている。つまり、性教育のような複合領域テーマには多職種連携を強みとする小児保健だからこそ課題を解決することができるといえる。

2) 小児保健は個々の職種・疾患・診療科をつなぐ

我が国における小児に関する学術研究団体のほとんどは、職種、疾患、診療科ごとに分けられている。その中で職種、疾患、診療科による分類ではなく、「子どもたちの健やかな成長」を目指して研究・知見を発信する日本小児保健協会は特別な存在といえる。

職種・疾患・診療科をつなぐコーディネーター、研究を統括するコンダクターのような人材育成の機会を日本小児保健協会が提供することも必要である。

3) 社会への普及啓発に強い

小児保健領域は多職種がいるからこそ、発信した情報や知見は多様な領域に広がる。そして、その情報や知見はそれぞれの実践で活用されることが期待される。つまり、研究と実践をつなぐといえる。日本小児保健協会として省庁あるいは行政と連携することで、実質的かつ包括的な施策の実現につながるであろう(図 4)。

5. さらなる魅力に向けて

最後に、日本小児保健協会、さらには小児保健領域全体を活性する仕組みを構築することを目指し、小児保健のさらなる魅力に向けて検討した。

1) 情報や知見を積み重ねる仕組みづくり

小児保健に関して求められる情報や知見は職種、医療・教育・福祉などの職場環境、従事対象者の年齢や特徴、さらには従事者自身の専門性の深さなどによって多岐にわたる。そのため、必要とされる情報や知見をその人に的確に届けるためには、研修・研鑽の積み

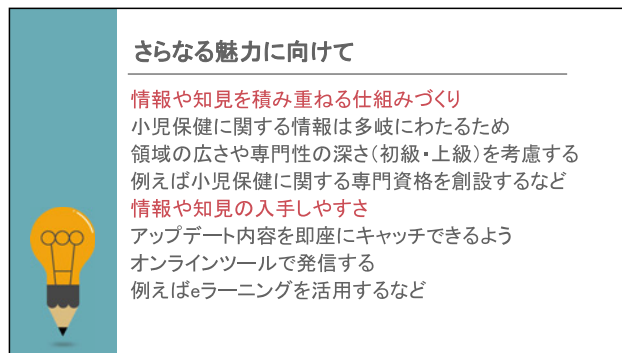


図5 さらなる魅力に向けて

重ねる仕組みづくりが必要である。

例えば、小児保健に関する専門資格を創設することである。小児保健、すなわち多岐にわたる情報や知見が求められるため、この専門資格取得に関する専門講習の受講を通して、多職種連携への理解がより深まることが期待される。さらに、初級、中級、上級といった段階性を設けることで継続的に研修・研鑽を積み重ねることへの促しになる。

2) 情報や知見の入手しやすさ

情報や知見は常時アップデートされている。これらの内容を即座にかつ簡易に入手できるような仕組みづくりは日本小児保健協会会員、さらには小児保健に携わる者への普及啓発となる。

例えば、eラーニングの活用である。eラーニングとは各受講者が自身のパソコン、タブレット、スマートフォンなどを使い、オンラインによって学ぶ学習形態のことである。オンラインであることは場所や日時

による参加しにくさを軽減し、また、視聴を繰り返すことができれば各受講者のペースで受講することができる。これにより、情報や知見が広く行き渡ることが期待される(図5)。

Ⅲ. おわりに

わが国では共生社会、インクルーシブ教育システム、多様性、LGBTQ+ (Lesbian: レズビアン・女性同性愛者, Gay: ゲイ・男性同性愛者, Bisexual: バイセクシュアル・両性愛者, Transgender: トランスジェンダー・性自認が出生時に割り当てられた性別とは異なる者, Queer・Questioning: クイア・クエスチョニング・どのセクシュアリティにも該当しない者, +: プラスアルファ・LGBTQ 以外のセクシュアリティ) の概念を推進している。しかしながら、言葉の広がりとその正しい理解とは必ずしも一致しているといえない。むしろ、ウェブやSNSなどで誤解につながる偏った知識が発信されたり、揶揄(やゆ)やスラングとして扱われたりすることがある。だからこそ、エビデンスのある正しい情報や知見が求められ、そして発信し続けることが重要である。

性教育をはじめ、これらのような複合領域テーマには多職種連携を強みとする小児保健だからこそ課題を解決することができるといえる。すなわち、未来の小児保健に関する課題の解決に向けて実際に取り組むことこそが日本小児保健協会、さらには小児保健領域全体の魅力となるであろう。